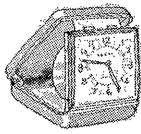


今後の日本農業の夢



東海近畿農業試験場

徳永美治

年が改まって間がないだけに、ほんのりと淡い幸が眼前にいっぱい広がっていく、そんな夢が私どもがいだく一般的な願いなのかもしれない。この夢を胸に秘めて一年を歩みたいと私も思う一人である。

しかし、今後の日本農業という規定された題目がつくと、微笑しながら心地よく夢みる夢ではなくなり、うなされるような悪夢にもなる一面を蔵しているような気もする。

日本農業の今後は、しばらくの間は、考え、苦しむ暗い夜長の悪夢をできるだけ多く見ながら、脱皮する期間が必要なのかもしれないし、それに耐えてこそ夜が明け、しらじらとする暁に、美しい、晴々とした夢を夢みることに期待がかけられるのではないだろうか。

凍りつくきびしい冬の一時、きびしい夢をみることも無駄にはなるまい。私なりの夢物語りをつづってみよう。

まず悪口を聞こう

耕された農地に種子をまくことにより農業は始められ、食糧としてまたはえさとして人間、動物の口に入ることによって終りとなる。生産する場から出発して、たべものになるまでの一連の流れがあり、その間に生産過程、生産物の品質、流通機構などの幾つかの問題が、技術的なもの、経済経営的な要素をからませながら、相互に関連しつつ、または独立的に積み重なっていく。工業も同じで工場→製造工程→製品→流通貿易→生活必需品の仕組みで動いている。

この頃、新聞社の評論家、銀行の調査マンによる国際環境の変化、または経済の特徴と日本農業との関連性を論述した報告がよく目につく。

私どもが読むと、なるほどと役立つところも多い。農業が工業と同じく産業の中の一つの座であり、相互に影響し、産業全体の中で息をしている

実感がわいてくる。この傾向は今後一層強まるに違いない。

こゝで報じられている、きびしい批判にも耳を傾けねばなるまい。明るい夢をみるために、じつとこらえることも大事なことだと思う。

戦後、植民地を失わない、都会は家も工場も焼かれて丸裸だった日本が、なぜ今日のような工業面での隆盛をみるようになったのか。国際通貨体制がゆれるたびに、海外から円切り上げの圧力を受けて苦慮するようになったのか。

これとは逆に農村は家は焼かれず、田畑は戦後自作農創設のために開放されたのに、後退ばかりしているのではないか。農家経済も戦後、農業所得が90%余であったのに、現在は農業面で約37%農外面で63%となってしまった。

この大きな格差は一口でいえば、工業は世界の人々を対象に、よりよい商品を生産して輸出振興をはかったのに対し、農業は島国1億余の人々を相手に食糧品を生産し、国内の兄弟に高く買ってもらうことばかり考えていたからともいえよう。

農業と工業の流れは同じだと考えられる中において、農業者自身常々努力してきたものの、このようにいわれる様相をのぞかせてしまった。

農業の始めから終りまで、産業としての意識を高く保ちつつ、今後の社会経済の変動に対応できるように、今日から心がける必要はないだろうか。新しい夢の原点である。

農耕地はどうなるか？

現代社会の人間行動を規制するものは、科学技術の信頼と社会的合理性だといわれる。

この2つの条件が、農業の始めの場である生産の場、すなわち農耕地にどのように響き、どのような姿に変えようとするのかをのぞいてみよう。

信頼する科学技術は、急激な工場の隆盛を導いた。その結果、廃棄物処理という難題が生まれ、

将来はどうかと不安はつるばかりだ。それは廃棄物の量、質ともに自然の分解還元能力をはかるに越えることに起因する。

人間が生存するために、第1義的に水と空気を清浄にすることを要求し、足下の土地は浄化万能の力を持っているという過剰意識から、廃棄物は土壤へ捨て場を求めてくる。

ひ素を含んだ工場廃水を、合法的のように深く掘った穴に捨てられていたものが、地下水に混入し下流に流れ、その地帯の井戸水を飲む部落にいまわしい風土病としてひ素中毒が出た例、洗剤のABSが検出されたり、pH4という強酸性を示す井戸水など、すでに問題は起っている。

長年月の自然の力によって作り出された清澄な地下水が、人間の目のとどかない所で、ひそかに作り変えられている現状をもっと認識せねばならないと、地質学者が指摘するように、そして土壤微生物の分解力は限界があり、微生物全能の原理は、近代科学の楽観主義に由来する幻想ではないかという、微生物学者の苦言に耳を傾けねばならない。

農耕地は将来、へたをすると還元利用されやすい場として、近代工業の凶器にさらされないとも限らない。

それゆえ土壤を汚染し、地下水をよごし、土壤微生物群に悪影響を与えるものはなんであるかを、食糧生産の場として監視するとともに、どの程度のものを浄化利用できるかも検討する必要がある。

人類生存の基盤として、緑を与える土地として保有できる農耕地を、今以上に大事にしなければならない。そのためには科学技術への理解を深めつつ、一方では、そのもつ能力を知り、他方では開発する努力を要請すべきであろう。

つぎに、社会経済的合理性の中で、最近価値観の変化がきわだってきた。経済成長優先から高福祉社会へ移行し、経済中心から人間中心に転換し、生産第一主義から知的活動中心となり、このような情勢は人間の自然への働きかけの対象として農業をとらえるようになり、緑へのいこいとして農業を求めようになってくる。

すなわち、農業者の生産のためにのみ農業はあ

るのではなく、都市生活者のレクリエーションとしての価値を含む、多目的なものへと変ぼうせざるをえなくなる社会環境がある。

工業都市で有名な市の農業指導所が、グリーンセンターとして名称が改められるとも聞かし、大都市近郊の農業者群が小学生の遠足、会社のレクリエーションのためのさつまいも掘りの場を提供している現場も、すでにできている。

果樹園が果物としての果実を生産するばかりでなく、さつまいも畑が芋を食糧として提供する役目だけでなく、美しい花の眺め、さわやかな緑の落ちつきを副次的に与える公益産業としての意義が、大いに認識、評価される可能性をはらんでいる。

市民1人当たりが何平方メートルの緑地帯をもっているかを示す数字として、公園率というのがあるが、イギリスの10.0に対し日本は0.8、この辺にも日本の文化の基礎の浅さがあり、上記の考え方は面白く判断されよう。

環境汚染の進む中であって、また人間の価値観が変化する時にあたって、農業の生産の場としての農耕地のもつ意義を整理しなおしてみることが、将来に羽ばたく夢を誘うことにはならないだろうか。

人間のわがままをおさえる

産業の発展、国民の福祉その他、社会的関連の中で調和のとれた形で、より幸福に人間生存を図るために、農業は存在しなくてはならないことはもち論である。

産業の流れとしては工業と同じく扱うことを前記したが、内容的に、質的には、無生物を相手とする工業と、生物を対象とする農業は異なってくる。

人間の作り出した英智は工業を発展させ、そして人間を廃棄物で苦しめる。

一方、農業ではその英智は、一ったん自然界または農業生産体系内の動植物を通して、人間に悪影響を与えている。

悪循環が、人間から人間へと直接結びつく工業に対し、人間から動植物、そして人間へと回る農業は、その中に自然体が介在する。この点のかみ合わせを理解して、無理やひずみのないように、農業を形成しなくてはならない。

農業哲学序説という論文の中に、農業の工業化は農産物の質的低下、人類の質的低下をきたすと記され、私は一時とまどった。

肥料の多施用、農薬の無雑作な使用など、人間の英智が発見した化学工業製品により、人間のために農畜産物を生産するという、農業本来の目的からはずれつつあることの警告である。

この考えが極端に発展すると無肥料、無農薬農業というやや教組的な発想になり、今までの栽培法を死の農法と決めつけてしまうことにもなる。

(実際にこのようなことを記載した印刷物が出版されている)。

今の世の中だから、極端から極端に走ることは否定しないが、私は調和のとれた農業を発達させるためには、自然生態系の攪乱、農業環境の汚染を防止しながら、一方では、化学工業の無理のない発展を願って止まない。

人間の英智が人間だけのわがままになることをさげ、自然界で動・植物とともに生きている一員である、つつましやかさを備えた行動の力になりたいと思う。

日本には、日本なりの古い歴史のもとで生き続けた作物もあり、文化が進む段階で、外国から導入され定着した作物もあり、それからが混合して食卓を楽しませている。シヨウガ、サトイモは古く、トマト、キュウリは新しい部類に属するのではないだろうか。

前者は後者に比し作付場所を選べば無農薬、無肥料栽培が可能のように思われるし、後者はかなり困難だろう。

日本古来の作物は、日本の土地に安定永住できる栽培環境もあったし、生態系の調和もあったに違いない。害虫防除のための天敵利用の成功例のほとんどが、有力な天敵を伴わず侵入した外来種であり、それも侵入後年数の浅い種類であるといわれ、この面の効用が異なっていることもうなずける。

それゆえ輪作体系を考える場合いずこでもトマト、キュウリ、レタス、カリフラワーなど近代的な名のつく野菜だけを配置することなしに、いくらかでも日本的、封建的な名のつくものも入れて貰いたいものだ。食卓ばかりでなく、栽培体系も和洋折衷の形にするのはどうだろうか。

電気牧柵で囲まれた中で牧草を食う牛が、背に受ける電氣的衝激にたえつつ、柵外の野草をつまみ食いしている風景がみられる。

ドイツ、オランダでは、富栄養牧草のみで育った乳牛が繁殖力の低下、原因不明の下痢を起こすといわれ、原始的管理のまま放置された牧野の貧栄養牧草を与えることにより、回復することが報ぜられている。

それゆえ牧草地の多様な植生維持のため、乳牛の栄養管理のためにも、貧栄養牧草の保存がオランダでは長年月大事に継続されているようだ。

極端と極端の中和は必要のようだ。最近、山菜料理に私どもの関心は高まってきているが、自然に近づきたいという都市生活者のムードだけではなく、乳牛と同じ動物的要求が、どこかにあるのではないかとさえ疑いたくなる。

農薬については詳しく語るのを省略するが、ただ3R(害虫の薬剤抵抗、農薬の残留、新たな害虫発生)が回っていることを述べるに止める。日本古来の作物、自然草地、農薬と害虫のいたちごっこなど、周辺の事情を自然的に素材につかんでいくと、化学工業だけの英智は、どうも人間のわがままの振り回しになり、それに自然的判断を入れることは、よりつつましやかさは増し、農業への高度の英智は生まれるのではないか。そんなことを祈ることが、さわやかな夢を抱かせてくれそうだ。

たべものの将来

農業と工業の流れは同じだが、もつ内容は違うし、工業についての英智だけでは農業には通じないなど、わかったようで分らなくなってきたのを案ずる。しかし目をさますと、ご理解願えることを期待したい。

さて、農業の終りの場として登場する、たべものの将来を夢みよう。

水—地球上で最も親まれていながら無視されている物質—は、近年の経済成長を制限しつつあるといったケネディ大統領ではないが、水についての興味ある記事、宇宙船の水の研究を引用し、たべものへの関心を引き出そう。

人間、クロレラ、バクテリアの3者の共存関係を利用し、人間の排泄物をバクテリアが利用し、

クロレラはこれと太陽光線で繁殖し、一部は食糧となり、尿を含む水分は蒸発濃縮して飲み水に使うという構想である。モルモットは、このようにして2カ月生きることができるそうだ。

イギリスでは機械牛という、機械にとうもろこしの茎葉、雑草、くずの葉などを投じ、青海苔をほし固めたような植物蛋白質を作り、ニューギニアの、植物葉をたくさん食べる土着民に食べて貰っている試験をしているという。

2つの話は、限られた空間で人間生活に必要なたべものと、水が合理的な輪廻で供給される可能性を示すとともに、ただ生命維持のために、たべものはあるということがわかる。味を楽しみつつ食するふんい気は全くない。

猫の嗜好決定期は生後2～3週間から始まるというし、人間も子供のうちに連食した嗜好は、単純に定着するという。共かせぎが多くなる今後において、インスタント食品の味がふるさとの味となりうる傾向は、ニューギニアの人々が機械製植物乾燥品を、唯一の味とするようになる方向と全く変わらない。

国民すべて味には無関心となり、味覚の平準化が思ったより早く来ないとは限らない。風味豊かなトマトより、ハウスでいつでもとれる淡白なト

マトが大衆から好まれると、苦笑した研究者を思い出すが、そうなるアフリカからソバ、コンニャクが安く入る可能性を示し、いささか問題は大きくなる。

味のゆくえは作物生産の過程をかえ、最後には土地制約、季節生産性から離れ、脱農業化することにもなりかねない。

規格化した味をもつ生産物は、格一的収穫時期をもつ栽培体系をもたらし、そしてより経済的、省力化された機械化をとる。ひいては機械化されやすい作物が、人間の選択以前に機械により決められてしまう。

最後には、農業はたべものの原料を生産することだけで、生産技術工場が作られ、人間のたべものになるとも推察できる。この変動の中に、今まで述べた自然生態系の調和の確保が、もっとも真剣に要求されてくる。

今とは違った次元で、農業の工業化は進むのではないだろうか。私自身ここまで書いてみたが、現今と将来の間に大きな思考の矛盾を感じてしようがない。味からでた味気ない話で、一連の悪夢からさめることにする。